八百万ってたくさんって意味らしい

くずもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
八百万ってたくさんって意味らしい

【Ｎコード】
Ｎ３８８２ＢＡ

【作者名】
くずもち

【あらすじ】
変な爺さんに妙なものを押し付けられた。
なんでも魔法が使えるようになったらしい。
その上異世界に誘拐されるという珍事に巻き込まれてしまったのだからたまらない。
ばかばかしいとは思いつつ紅野　太郎は実際に魔法を使ってみることにした。
この魔法、自分の魔力の量がわかるらしいんだけど……ちょっとばっかり多すぎじゃないか？

異世界トリップものです。
主人公最強ものなのでご注意ください。

プロローグ　（前書き）

初めまして＆お久しぶりですくずもちです。
ファンタジーもの初めました。
オリジナル物書こうとしたら、頭の中こんがらがってきますね。
つたない文章でまったりと行きたいと思いますのでよければどうか
よろしくお願いします。
暇つぶしにでもなれば幸いです＾＾

プロローグ

深々と雨の降りしきる空。

力のない瞳で老人が一人、自室の窓から静かに雨粒を見上げていた。

ひんやりとした空気は、体温を少しずつ彼から奪ってゆく。

同時にそれは、彼に魂が抜け落ちていくような錯覚を覚えさせていた。

「もうすぐ終わりだのう……」

そして一人、彼はその感覚に身をゆだねながら呟くのである。

髪は白く草臥れ、蓄えた自慢の髭にもすでに艶はない。

顔色からは生気がまったく感じられないことだろう。

何とも情けない話だと自嘲気味にほほ笑んだ。

彼の命は今まさに、この辺境の小さな小屋で終わりを迎えようとしていた。

振り返ってみれば長くも短い生涯だったと物思いに更ける。

幸い、その時間だけは十分にあった。

彼はさる王国に使える魔法使いだった。

高い魔法の素養のあった彼は、幼い時から魔法を学び、さらなる高みを目指して世界を廻る旅をした。

その旅の途中ある国に属することになった彼は、高い魔力故に生きた数百年という長きに渡り、魔導の道を邁進し続けたことで有名だった。

結果的に優れた魔力は国を栄えさせるために大きく貢献した事は間違いないだろう。

その過程でいくつもの魔法を研究し、彼の英知は神にさえ届いたのではと噂された。

後進達の指導をし、国を導く守り手も育て上げることが出来たと自負している。

やれることはやった。

人生に悔いなどない……とは言い切れないが、満足出来る基準は満たしていると、床に伏した今なら割り切れもした。

思えば魔法一筋の人生だった。

そして魔道の探求も、彼自身納得の行くところまで達する事が出来たとうぬぼれではあるかもしれないが、満足もしている。

ただ、このままではあっけない幕切れであるとは感じていた。

まだもう少しはあると思われた寿命は、戦争で受けた他愛ない古傷

によって、肉体的な死を迎えつつある。

となれば、とるべき道など限られるだろう。

こうなれば残り少ない人生を捨ててでも、己が生涯を懸けた魔導にこの命すら捧げてみせよう。

決心するまでに、そう時間はかからなかった。

それから彼は国の者達に別れを告げ、この人里はなれた山奥にやってきた。

目的は一つ、最後にして究極の研究を成し遂げるためだった。

そしてその成果が今まさに形を成そうとしている。

間に合った。

万感の思いを込めて彼は瞳を閉じた。

「魔法陣の動作確認……同時展開。……世界の番人よ、その門を開け。我が願いを聞き届けろ。究極にして至高、我が生涯すらも飲み干す魔法を今ここに……」

床に伏したまま、彼は祈る。

ただ切に、最後の魔法の完成を。

魔法は彼のすべての命を吸い上げ、燃やし尽くすだろう。

しかしそのことに一辺の悔いも残すつもりなどなかった。

百凡の人間がいくら集まろうが到底なしえないであろう至高の魔法を持って、すべての魔力を解き放つ。

老魔法使いを中心に、大地に刻み込まれた魔法陣が数キロに渡って光を灯し、天すら埋め尽くす記号の群れが、光を空へと運んでゆく。

光は空を割り、扉を開くだろう。

こうして老魔法使いの。

彼の生涯は幕を閉じた。

そして魔法は完成する。

彼の願いと共に……。

プロローグ　（後書き）

というわけで初めて見ました。
二次創作で書いてみたことはあるんですが、今回はオリジナルです。

一話

「……なんだか半生を偉そうに語られた気がする」

変な夢で目が覚めた。

しかし目が覚めたという割には感覚がはっきりしなかった。

そして、まずここがどこだかわからない。

右を向いても左を向いても、見たことも聞いたことも、ついでに言うなら床すらない七色の？　ともかく謎と言うのがなによりぴったり来る空間なのだ。

そんな謎空間にふわふわと浮いている。

なのこれ、意味わからん。

「……」

「……」

そしてなにがおかしいって、目の前にいるこいつがおかしい。

見知らぬ半透明の爺さんが浮いていた。

しかも鼻がくっつきそうな至近距離でだ。

「なんなんだこの状況……」

はっきり言って悪夢である。

しかも現状指一本動かせないとくれば、もうため息しか出てこなかった。

「……夢じゃよ。ここはお前さんの夢の中じゃ」

「そうか……嫌な夢もあったもんだな」

うんざりと吐き捨てるように言う。

どうやら口だけは利けるらしい。

だが肝心の話し相手は、口を開いてもとことん意味不明だった。

それでも俺は何とか目の前の爺さんを理解しようとがんばってみたんだ。

それしか出来なかったとも言う。

見た目は長い顎髭に、ローブ姿という、いかにも魔法とか使ってきそうなデザインの爺さんだ。

しかしどこか目が虚ろで半透明なのが特別気にかかった。

はんとうめいである。

というかなんで半透明？　近所のネコだってもうちょっと存在感があるぞ。

俺はさっそく匙をあさっての方向に放り投げた。

わかるわけねぇし。

俺、紅野　太郎は何の変哲もない大学生である。

そもそも、ついさっきまで大学で講義を受けていたはずなのだ。

まぁ少しばかり夢の世界に旅立っていたことは否定しないが……ともかく授業を受けていたことだけは間違いない。

それなのに、今は七色に輝く不思議な空間でジジイといっしょに漂っていると。

ひょっとしてあれか？

ちょっと閃いた。

守護霊とかいうやつ。

これは居眠りした俺に、先祖のじいさまが夢枕に立ってお説教しに駆けつけてくれたんじゃないだろうか？

だとすればここは一つ、謝罪でもしておかねばならないだろう。

「これはこれはご先祖様。申し訳ありません。私めは授業中に居眠りなどしてしまいました。

正直に告白し、今後こういったことがないように反省いたしますので、どうか成仏してくださいませんかね？」

「……わしゃ、別にお前の先祖の爺さんじゃないんじゃがの？」

誠心誠意頭を下げたというのに、爺さんは気まずげにそう言ってきた。

どうやら早とちりだったようだ。

「ああ、そうなんだ。いや、たしかに変だとは思ったんだ。顔も見たことなかったし」

「……適当なやっちゃなー」

「よく言われるけど、長所だと思ってる」

「どうなんじゃろそれ？」

呆れて首をかしげる爺さんに、俺は自信満々に頷いておいた。

「まぁそれはいいよ。ところでここが夢ってことは、ようは目が覚めればいいんだよね？」

気楽にそう尋ねると、爺さんは予想に反して首を横に振った。

「……いや、残念ながらこの夢は覚める事はないじゃろう」

「……なんで？」

「まぁ戸惑うのも無理はないがのぅ。だがこれはすごく幸運なことなんじゃよ？」

「いや、さすがにふざけるなと」

覚めない夢など死んでいるも同然じゃないかと思うのだが。

しかもセクシーな美女とならともかく、こんな幽霊爺さんと永遠に夢の中などごめん被るりたい。

趣味の悪い冗談と言うのならまだよかったが、爺さんはそんな風でもなかった。

「正確に言うなら、今のおぬしは我が魔法の術中におる」

「ならさっさと出せよ」

「……せっかちな奴じゃのぅ」

不満そうに口をとがらせる爺さんはともかく、何ともファンタジーな台詞に俺もまた一層うんざりしていた。

魔法だと？

何を馬鹿なという感じである。

格好が魔法使いっぽいからって、そんな設定まで凝らなくてもいいと思う。

ただ本当に頭が痛いのは、実際おかしなことになっているのも確か

だということだろう。

「魔法……はともかく、なんの目的でこんなことを？」

とにかく現状を打開する方法を目の前の爺さんなら持っているだろうとそう希望も込めて尋ねてみたのだが、いきなり爺さんは真剣な面持ちで力強く宣言した。

「単刀直入に言おう、わしの世界に来てもらう！」

「え？　嫌だけど？」

即答したら、爺さんはちょっと涙目になった。

「……そんなすっぱり断らなくても」

「いや、断るでしょうよ。俺、今花のキャンパスライフ真っ最中よ？」

あっさりと俺はそう付け足させてもらった。

こちとら春に入学したばかりの新入生なのだ。

つらく苦しい受験勉強が終わり、ようやっと束縛から解放されたというのに、なぜ故にこんな不思議爺さんの戯言に付き合わねばならないのかと。

否、付き合う理由など欠片も見当たらない。

だからきっぱりと拒絶したことで諦めて欲しかったのだが……。

爺さんは諦めるどころか「残念じゃのう」と自分の髭を扱きながら、にやりと何とも不敵に笑いやがったのである。

「ふむ……実はものすごい特典も用意しておるんじゃが？」

「……一応聞くだけ聞いてみるけど。なに？」

「うむ、我が魔力をお前にやろうと思っておる！」

「なにそれ、いらない」

再び即答すると、爺さんはものすごく落ち込んだ。

「そんなばかな……。わし、世界でもっとも高名な魔法使いなんじゃよ？

その魔力をいらんじゃと？」

そんな焦点の合わない眼で呟かれても困ってしまうのだが。

「いや、そもそも魔法とかわけがわからないし？　存在しないものをもらっても？」

はっきり言ってそんなもの、通販の幸運グッズ位うさん臭い。

速やかにお断りしつつ、一応お年寄りということもあって懇切丁寧に説明すると、どういうわけか爺さんは大いに驚き、目をむいていた。

「なんと！　こちらの世界には魔法がないのか！　不便な世界じゃ

のう！」

「いやいや、そこなのか驚くところは？　全然不便じゃないし。魔法がある方が不条理だと思うよ？　科学的に考えて」

「ふむ……科学とやらがどういうものかは知らんが、それは魔力を使わぬ力なんじゃな？　しかしおかしいのぅ。お前さんからは並外れた魔力を感じるんじゃが……」

「そうなの？」

半ば適当に話を合わせていたのだが、気になる台詞があったので反応してしまった。

すると爺さんは俺の言葉に必要以上に食いついて、力強く同意してくれた。

「そうとも！　でなければわざわざ出向くわけがあるまいよ？」

「いや……そもそもあんた何のためにここに来たんだよ？」

俺は爺さんから何か貰えるようなつながりはないと断言できる。

本音を言わせてもらえば早々に終わらせて、早く帰って欲しいのだけれど。

だが爺さんは露骨に肩を落としてため息をつくと、何やら語り始めたじゃないか。

なんだかまた時間がかかりそうだと俺は確信した。

適当に聞くのが吉だな。

「……それはのう。これはわしの我儘なんじゃよ」

「ほう」

「わしはな？　とある世界で魔法使いをしておったんじゃ」

「ふむ」

「そして人並みはずれた魔力と長年の鍛錬の結果、世界で類を見ないほどに強力な魔法使いとして尊敬を集めておった」

「へぇ」

「自慢ではないが、我ながらものすごーく自国に貢献をしてきたと思う。しかし、そんなわしにも死期が訪れたのじゃ」

「……それはお気の毒に、ちなみに何歳くらいだったの？」

「ぴっちぴちの５００歳じゃ」

「……十分すぎるよ。天寿を全うしているよ」

「む！　おぬし何気に酷い子じゃのう。まぁそういうわけで、わしは死んでしもうたわけじゃな」

「ご愁傷様でした」

「……なんか受け答えに適当さを感じるんじゃが？」

「気のせいでしょ。被害妄想乙」

「そうかの……？　では続けるが。しかしだ！　わしは死ぬ直前に、ある魔法で自分の魂をこの場所へ飛ばしたんじゃよ！」

「……なんでまた？」

聞かない方がいいかなとは思ったんだ。

思ったんだけど、流れで聞いてしまった。

すると遠慮なく爺さんはぶっちゃけた。

「だって……せっかく鍛えたのにもったいないじゃろ？　魔法もすごいの沢山覚えたんじゃし？」

「いやいやいやいや。それこそ俺の知ったことじゃないだろう」

あきれてものも言えないとはこのことだ。

そんなもん他所やれと。

主に俺に迷惑のかからないところで。

「まぁそう言わずに。残念じゃが弟子達もわしほどの器はなかったんじゃよ。

最後の魔法も伝えられんでのぅ。だからわしは死ぬ直前にすべての魔力を振り絞って、わしの魔法と魔力を受け継ぐ素養のあるものに

すべてを託そうと考えたわけじゃ！」

えっへんと、このあたりになってくると入れ歯でも飛ばしそうな興奮具合だった。

同時に俺との温度差もすごいことになっていたが、その辺りはどうでもいいらしい。

「それで俺のところに来たと……わざわざ異世界から」

「その通りじゃ！　お前さんを探し出すのには苦労したんじゃよ？」

何ともめちゃくちゃな話に思えるのは俺だけだろうか？

しかし爺さんは、自分のやったことにむしろ誇らしげだというのがいっそう始末が悪い。

だがその内容事態は少し意外でもあった。

爺さんが俺のところに来たのは、俺自身にも原因があるらしい。

顔立ちこそ少しハーフっぽいなんて言われる俺だったりするが、黒い髪も瞳も何の変哲もない日本人の基準からそう大きく外れてはいない……と思う。

背丈も普通だし、そんなに目立つ方でもないだろう。

そんな俺に魔力なんて面白スキルがあるというのがまず初耳だった。

「……俺に魔力ねぇ」

ひょっとして俺って伝説の勇者の生まれ変わりだったとか？

……なんて面白い妄想を考えてみたりして。

うん……ないな。

だいたいそれならそれで面倒くさそうだ。

「うむ！　そういうわけで、おぬしは自らの魔力とわしの魔力を併せ持った、文字通り最強の魔法使いへと昇華するわけじゃな！　これぞ我が願い！　わしすらも届かなかった高みへと遠慮なく駆け上ってくれい！」

爺さんは話をとても偉そうに締めくくると、そのまま期待に満ちた目でチラチラと俺の様子を伺っているようだった。

「……」

話はしっかり聞いた。

聞いたうえで考えれば、おのずと答えは見えてくる。

「帰れ」

「なぜに！」

涙目で俺に詰め寄ってくる爺さん。

がっくんがっくん首を振られても、俺の答えは変わるわけがない。

「いやだって、そんな魔法とか言われても正直引くし」

「引くって君ね！　異世界からわざわざ来た老人を追い返すかの！　普通！」

「いや、だから俺となんも関係ないよね、それ？　ものすごく面倒だし」

「むむむ、言いよるのぅ……だがもう遅いんじゃよ。言ったであろう？　これはわしの我儘じゃと」

突然俯き、しかしどこか悪い笑顔の爺さんに何やら嫌な予感がした。

爺さんは最初なんと言っただろうか？

確かこう言わなかったか？　この夢は覚めることがないと……。

「……あんたまさか」

「そのまさかじゃ！　無理矢理でも行ってもらうぞい！　もはや後戻りなど出来はせん！　この夢から目覚める時！　おぬしは強制的にわしの世界に転移することになるじゃろう！」

ビシッと爺さんは本当にろくでもないことを目一杯宣言してくれたのだった。

どうやら一連の説明は前ふりのようなもので、結局俺は異世界とやらに引きずり込まれるらしい。

「……誘拐じゃんか」

「知らんもん！　わしはこれから死んでしまうんじゃもん！　そんなの知ったこっちゃないわい！　せっかくだから快く旅立ってもらおうと思ったが、もう知らんもんね！」

「この爺め……開き直りやがった」

それはもう見事な、駄々っ子も真っ青な開き直りっぷりだった。

呼びとめようと手を伸ばすが、爺さんは素晴らしい速さで遠ざかってゆく。

そしてどこからか漏れ出る神々しい光の中にゆっくりと溶けていった。

わざわざさわやかな笑顔でこちらに手を振りながらだ。

「じゃ！　良い異世界ライフを願っておるぞ！　よかったのう！　これでいきなり世界最高の魔法使いの誕生じゃ！　おぬしの完成した姿が見られんのが残念じゃ！」

「聞いてない！」

「ちなみに役に立ちそうなわしの魔法も最低限無理やりぶち込んでやるから安心せい！　存分に使ってやってくれい！　……まぁ、生きておればじゃが？」

「だから聞いてないって……何その補足！　怖いんだけど！」

「では幸運を祈る！　なるべく死ぬなよ！」

「祈るな！　というか死ぬかもしれないのか？！　そこんとこはっきりしてくれぇ！」

俺の叫びはむなしく木霊するのみだ。

健闘空しく、爺さんはすこぶるいい笑顔で成仏していったのだった。

「なんだったんだいったい……」

結局七色の空間に一人取り残された俺。

どうしようもなく、ただただ唖然とするしかない。

「……あの爺さん、勝手な事ばかり」

爺さんの言葉を丸ごと信じるなら、俺はこれから異世界とやらに行かなければならないらしい。

「……はぁ、脱出方法もわかんないし、強制ならどうしようもないか」

途方にくれながら、ぼんやりと呟く俺。

残念ながら爺さんの言う通り、異変はすぐに表れる。

俺は意識がどこかに流されていくような不思議な感覚を味わっていた。

全部夢でありますように……。

そう祈りながら――――　紅野　太郎は不本意だが異世界へと旅立出されたのである。

実に不本意だが。

大事なことなので二回言いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3882ba/

八百万ってたくさんって意味らしい

2012年1月10日01時50分発行